積極的に表現する授業づくり

ー音楽の授業を通してー

学習開発コース（10220915）　三　澤　和　沙

音楽科の授業における「表現」に着目し，自分の内にある思いを，人の目を気にせず，より楽しく存分に表現できるようにするための教師の手立てを研究する。文献研究と授業実践から，音楽科では①「表現」と「鑑賞」が常に一体化していること，②他者とのかかわり合い，③基礎・基本の定着の３点が大切であることが明らかになった。また，積極的な表現を支えるのは，安心して心を開くことのできる集団づくりであると考えた。

［キーワード］　小学校音楽，「表現」と「鑑賞」，かかわり合い，基礎・基本

１　問題の所在と方法

青年海外協力隊として赴任した途上国パラグアイでの音楽教育活動を通して，改めて日本の教育に対する緻密な計画性と，ものの豊かさとを知ることができたと同時に，日本の音楽教育との相違点を感じた。それは，授業の場においてより楽しみたいとするパラグアイの児童と，楽しむよりも上手になることを優先する日本の児童との学習姿勢の違いである。国民性の違いと言ってしまえばそれまでだが，授業を楽しんだ結果として表現してよかったという満足感や達成感が残る指導方法でありたいと考えている。

そこで着目したいのは，音楽科の授業における児童の“表現”に対する姿勢である。日本の子どもたちの姿勢は，年齢を重ねるごとに消極的になる傾向があるように見える。昨年中学校で音楽科講師を務めていた際も，存分に表現しきれていないように感じた。原因として，集団の中で，間違いを恐れたり，恥ずかしがったり，自信がなかったりすることがあげられるのではないだろうか。自分の内にある思いを，人の目を気にせず，より楽しく存分に表現できるようにするためには，教師はどのような手立てを講じていく必要があるのか。先行研究から，身体表現を重視した授業，グループ活動で仲間との関わりを重視した授業，導入を工夫して子どもの授業に対する関心・意欲を高めようと試みる授業の実践を知り，これらの教師の手立てが，子どもたちの積極的な表現に繋がるのではないかと考えた。安心して心を開くことのできる集団づくりが積極的に表現することを支えていると考える。これは音楽科のみに関わらず，他教科でも共通して言えることだろう。

２　先行研究の検討

(1)子どもの満足感

真鍋（1994）は，「音楽の授業においては，表現したいという想いを持たせ，安心して表現できるよう配慮し，表現してよかった満足感を残すことが大切」と述べている。そのために，①子どもの考えや世界を大切にする。②表現が平気になり，表現したいという意欲を持たせるようにする。③表現したいことが，聴き手に伝わる方法を身につけさせる。という３つの事を授業の柱として，「教師に向かって表現できなくても，友人同士になら自己表現できることを大切にしたい」としている。このようなベースのもとで行われる授業は，子どもに安心感と必要感を持たせ，積極的な表現を引き出す。また，「表現」は音楽を経験する領域の一つであり，音楽の授業の核となる活動である。子ども主体の真鍋の提案は，音楽科の基本理念そのものであると考える。

(2)「表現」と「鑑賞」

塩野（1987）は，「受信側の視点の重要性への認識が，現在の音楽科教育において欠落しているのではないか。『鑑賞』という受信行為なくして『表現』という発信行為は意味を成さない。広義の『鑑賞』という行為を経て，はじめて『表現』という行為の価値判断が成立する。表現には必ず『鑑賞』という立場が存在するのであり，他者の表現を受容し，感動し，吸収しようとする柔軟な発想と姿勢が育成されていなければ，自己表現の価値を失ってしまう。技術面とともにそれを受容する感動

面の体系化にも目を向ける必要がある。」と言っている。表現と鑑賞は常に一体であり，相互理解がベースとなっている。表現者のみでは成り立たないものなのである。そうすると，いかに表現する側と受け取る側からなるより良い集団づくりが重要なのかがわかる。

また佐藤（1994）は，自らの授業実践を通して，次のことを述べている。「声を出す，口を開けることは自然なことであるが，学年が進むにつれて，勇気が必要になる。自分の想いをそのまま声に出して表現できる喜びと友達と声を合わせる喜びを感じさせたい。」小谷（1994）も，「一人一人の声を認め合うことがなければ，個々の心が開かれた表現とはいえないし，集団に埋もれた心では，生き生きとした表現はできない。子どもたちが一人一人の表現を認め合い，自分の個性をクラスの中で発揮していくことが大切である。」と述べている。関連して，多くの論文で，ペア学習やグループ学習の“「表現」と「鑑賞」によるかかわり合い”の特性を活かした授業展開を提案していることに気付いた。ミニコンサートの設定やグループ学習を設けて形態を工夫し，子どもが主体的・創造的に活動できるような工夫がポイントとなってくる。

(3) かかわり合うことの大切さ

小谷は，「教師と児童，児童同士の信頼関係は，学習に対する意欲に大きく影響する。教師もワンフレーズを演奏する際には本気で演奏することを心がける。そうして子どもたちも本気で聴こうとする。そのような積み重ねから，教師と児童，児童同士の信頼関係と心の響き合い・結びつきが生まれる」と述べている。表現者と鑑賞者の中に信頼関係が無ければ，豊かな表現に意欲的に取り組むことは難しいと考える。

(4) 基礎・基本の必要性

そのような活動をより充実させるために，多くの論文で，基礎・基本を身につけさせることが必要であると述べられている。学習指導要領には教科の目標として『表現及び鑑賞の活動を通して，音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに，音楽活動の基礎的な能力を培い，豊かな情操を養う。』という記述がある。解説によると，「音楽活動の基礎的な能力」とは，生涯にわたり児童が楽しく音楽と関わっていくことができるよう，小学校の段階ではぐくんでおきたい表現及び鑑賞の活動に必要となる音楽的な基礎的な能力のことを意味している。児童が思いや意図を持って歌ったり演奏したりする能力，感性豊かに鑑賞できる能力のためには，直接的な音楽体験を通して音楽の諸能力を身につけるようにすることが大切であるとされている。また桂も（1987），「いきなり楽曲の持つ魅力に頼ったような授業は，児童・生徒の照れを誘発するようなものになりかねない。基本的な簡単なものから，心豊かに楽しむところから出発する必要がある。」と言っている。子どもたち自らが「どのように表現したいか」また「そのためにはどうすればいいのだろうか」と考え，必然的に技能面を身につける必要性が生まれてくるはずである。これらのことから，基礎・基本を子どもたちが進んで身につけるような方法で，短時間でも継続していけるような工夫がポイントとなってくると考える。

3　実践と結果（明らかになったこと）

(1) 山形県内A小学校での実践結果について

①「表現」と「鑑賞」

歌唱『夕やけこやけ』を教材とし，グループ活動を通して，「聴く人が様子を思いうかべることができるように工夫して歌おう」という題材で授業実践した。4～5人の少人数グループで活動を行わせた。グループでの活動により，互いの想いを認め合い尊重し合いながら，音楽という形にしていこうと一生懸命に考える姿が見られた。（写真1）

写真1．グループ活動の様子

さらに，グループの成果を発表し，聴き合うことで，表現の仕方や考え方は多様であることを知り，発表したいと挙手する子どもが多かった。子どもの中には「楽しかった」という感想を書いてくれた子どもが複数いた。この感想からも，聴き

手を意識した表現活動，聴き合う活動が子どもの表現に対する意欲を引き出すと考える。

また，子どもたちの歌う姿勢や態度，歌声に明らかな変化があった。前半に歌ったときは，メロディー重視で元気な歌声が響いた。一方，活動後に歌ったときは，自然に体を揺らしながら，表情も大変豊かで，強弱に気をつけた美しい頭声発声が教室に響いた。音楽で想いを伝えたいという気持ちが表現に繋がった結果だろう。

しかし，聴き合う活動について配慮が必要であるとも感じた。それは，全員が同じ活動，同じように発表できる時間を十分に設けることである。聴き手を意識させた活動であるならば，全員が発表を通して達成感・成就感を味わうことができるようにしたい。全員が同じ活動を行うということは，児童の表現に対する恥ずかしさやためらいも和らげると考える。

②他者とかかわる力

積極的に表現できるようにするためには，他者に心を開き，仲間としてのつながりを高めることが必要である。そこで導入時に，他者とかかわる力をつけるために『手拍子まわし』を行った。これは，全員で一つの輪になり，ひとり一発ずつ，順に手を打ってリレーしていくものである。気持ちよく授業に参加できるようにするためには，導入部分で工夫ができるのではないかと考えたからである。子どもたちは笑顔いっぱいで仲間とのかかわりを楽しんでいるようだった。手拍子まわしが成功した際は，学級全体で飛び跳ねて喜んだ。仲間と一つのことを成し遂げた一体感を感じ，仲間とかかわることの喜びを心から感じた姿だろう。その後の授業でも継続して元気に歌う姿が見られた。

(2) 山形県内B小学校での実践結果について

①身体表現の有効性

- 教材名：『バードウォッチング』 -

歌唱に身体表現を加えた活動で，うまく歌えない・踊れないながらも，どの子どもたちの表情も生き生きとしていた。音楽活動を存分に楽しんでいる様子が伺えた。友達とみんなで同じ動きをしながらの活動では，どの子も恥ずかしがらずに，上手い・下手にこだわらずに楽しんで活動していた。

②基礎・基本の必要性

- 教材名：「エーデルワイス」（器楽）

全員の前に立ち，リコーダーの指遣いを実際にやって見せながら「歌詞で歌う→階名唱で歌う→階名唱をしながら指遣いの練習→実際にゆっくりリズムをつけずに吹いてみる→ゆっくりとリズムをつけて吹く→曲に合った速さで吹く」といったプロセスを，曲を短く区切りながら行った。粘り強く活動についてきた子どもたちは，スムーズに楽曲全体を吹くことができるようになった。階名や指遣い，リズム等の基礎・基本をしっかりと身につけさせることが，表現することを楽しむためには必要であることが分かった。しかし一方で，練習の途中の段階で飽きてしまう子どもも少なくなかった。A児は普段から好ましくない行動を起こしがちな児童であったが，リコーダーで新しく習う『エーデルワイス』の指遣いの練習では，取り組む前から「できない」と言って練習をしぶる様子が見られた。音楽に対する苦手意識や練習の煩雑なイメージの改善には課題が残った。

4　考察

(1) 聴き合い・表現し合う

表現は“自己表現”であるが，それは聴き手がいてこそそこに価値が生まれ成り立つものである。「聴き手」を意識した活動では，「聴かせたい」「想いを伝えたい」という気持で，子ども自身が必要感を持って取り組むことができると考える。

(2) 他者とのかかわりを大切に

『手拍子まわし』の活動では子どもの喜ぶ姿が多く見られた。（写真2）仲間とのかかわりが楽しい，安心できると思える集団では，表現する意欲や仲間と認め合おうとする意識が高まり，より積極的な表現に繋がるのではないだろうか。

写真2. 導入時のかかわり合いの活動

また，これまでの経験からも考えると，導入で既習曲を歌う際に身体表現を加えたり，ペアやグループでの表情の確認や心を合わせて歌えるような活動など，一般的なウォーミングアップの活動を工夫することで，他者とかかわる力をつけることに繋がるのではないかと感じ，導入部分の工夫による効果の可能性を感じた。

(3)基礎・基本の定着のために

リコーダーの指導で，スモールステップで基礎からしっかりと練習に取りくんだ子どもたちは，曲が完成に近づいてくると，演奏を楽しみながら，より表現を深めるためにタンギング等の技能習得に積極的に取り組んでいた。基礎・基本が身についていると，表現の楽しさをより感じることができることがわかる。

5　到達点と課題

これまでの研究及び実践の結果から，音楽科の授業において積極的に表現するために必要なことは，①「表現」と「鑑賞」が常に一体化していること，②他者とのかかわり合い，③基礎・基本の定着の3点であることが明らかになった。しかし，実際に授業をしてみると，以下の実践に関わる課題があると感じた。

(1)基礎・基本の定着と個人差への対応

特に技能が必要となる活動においては，練習の継続や気持ちの面での粘り強さも要求され，技能面での個人差は顕著に表れる。さらに，歌唱表現においても，より豊かな表現のために技能や知識が必要となってくる。そのような背景から，音楽に対して苦手意識を持ってしまう子どもも少なくない。一方，個人的に音楽を習っている子どもにとっては，個人差のある集団が対象である学校の音楽の授業は，物足りなく感じてしまうかもしれない。音楽科特有の技能習得に伴う意識も，表現への消極的な姿勢の原因となっているのではないだろうか。

これらを打開するために，またより豊かな表現活動を積極的に行うためには，基礎・基本を身につけることが必要となる。無理なく楽しく基礎・基本を定着させるためには，憧れを抱かせるような動機づけや，スモールステップによる無理のない日々の指導が重要であると考える。それが子どもの自信と意欲につながり，積極的な表現のために必要な土台となると考える。実践場面における，具体的な基礎・基本を定着させる指導の研究を深めていきたい。

(2)教師のはたらきかけ

子どものつぶやきや気づきは，集団全体で学びを深めるチャンスである。このつぶやきや気づきを，教師がどう捉え，全体にフィードバックしていくかで，子どもの成長が大きく違ってくる。また，それは互いの考えや意見について集団全体で考えていく時間にもなり，互いを認め合ったり助け合いながら，かかわりづくりや人間関係構築に大きく関わると考える。教師の適切なはたらきかけにより，子どもの自己肯定感を育てたい。そうして「間違ってもみんなが認めてくれる」「一緒に考えてくれる」という安心感を持ち，積極的な表現へとつながるだろう。

今年度の研究で知識として分かったこれらの成果が，実践の場面でできるようにすることが次年度の課題である。

引用・参考文献

桂博章：「イメージ形成と自己表現力」，『季刊音楽教育研究』，第30巻，第1号，音楽之友社，pp.7-14，1987

小谷由美：「心を開く表現から感動の共有へ－子どもたちが進んで学ぶ基礎・基本」，『教育音楽7』，音楽之友社，pp.40-43，1994

熊木眞見子：『子どものコミュニケーション力を高める！音楽遊び ベスト40』，明治図書，2007

真鍋なな子：「心を満たして音楽的に表現できる子を育てる－ペア学習の効用」，『教育音楽7』，音楽之友社，pp.43-45，1994

MEC Digital，http://www.mec.gov.py/cmsmec/ アクセス　2010年12月7日

文部科学省：『小学校学習指導要領解説 音楽編』，教育芸術社，2008

Paraguay Sistemas Educativos Nacionales，http://www.oei.es/quipu/paraguay/index.html アクセス　2010年12月10日

塩野勇記：「創造性の受容と享受の原理」，第30巻，第1号，音楽之友社，pp.2-6，1987

竹下英二：『優しさと思いやりの育つ 音楽科グループ学習』，明治図書，1992